

里の林をイヤシロチにしていくこと

2010/09/25

NPO 法人 若東環境コモンズ

事務局 草苺 健

国内外を旅するそのつど、胸膨らむ土地によくであいます。その印象の違いが自分の住む所と何が違うのかを考察するにつけ、身の周りには、たとえば街路、住宅街、最寄りの林などいやな風景も多く、我慢している自分に気づかされます。ずばり、心地よい状態の反対にあり、その状態も甘んじて受け入れ、かといって改変する術もなく諦めざるを得ません。所詮、他人の土地だったり、公有地だったりするからです。

17世紀から、長崎に出入りしたケンペルやシーボルトなど欧州人は、江戸への参勤交代の際に沿道で植物採集をし、その様子をつぶさに記録しました。目を見張るのは、当時の田園の沿道では、植物標本として完全な形の雑草が採集できなかつたと嘆いていることです。その原因を括って言えば、田畑に肥料としてすき込むために、常に刈られていたのです。常に刈られている沿道と田園を想像してみてください。この草を刈ることに象徴されるのは手入れ、この手入れが当時の美しい田園風景を支えていたわけです。

高温多湿で、植生が豊かで繁殖力も旺盛な日本で、植生の繁茂を押さえるというこの手入れを怠ると風景は暴れていき、風倒木を放置したりすれば、場の荒れ方は数段倍増してきます。荒れていく風景を放置することと、誰かが手入れすることの差は、実はとても大きいのですが、これは見過ごされているのが現状、いえ、「現代」の特徴といえます。

住宅地の景観などを改善することは難しい面がありますが、身近な里の林はまだ方法がある。「刈る」「切る」「運ぶ」という基本的な作業だけで、場は胸の膨らむ、心地よいイヤシロチに変わる。イヤシロチを実現してみると初めて土地の魂が見えてくるのを、わたしは手入れ作業の経験で知りました。イヤシロチに代えていくわたしたちのこの作業を、ある方は茶道の「しつらえ」に例えてくれました。主客同一で茶を楽しむのが茶事で、その際、亭主は心を込めて茶室・庭・路地などや掛け軸や花などしつらえる。客は自分たちが楽しく過ごせるためにしつらえてくれたことに気づき、さりげない会話のなかに、その趣向をほめ、感謝する…。

これは言わばイヤシロチ作りの世界に通じます。花鳥風月の動きに気を配りながら、作る側、味わう側に交流が生まれる。現代に忘れられてしまった大事な部分が、里の林の手入れに象徴されているようです。もういちどイヤシロチという視点から土地、地域を考えてみる意味は、わたしたちの健やかな心身のためにもとても大きいと思います。